

ずいそう

被災地は『次の』復興へ

丸山結香



2004年10月23日に発生した中越地震から、間もなく4年になろうとしている。

地震発生翌年に、被災地の生業再生を支援する(有)やまこし道楽村を立ち上げ、被災地が復旧を遂げる様子を見続けてきた。

私たちが、活動の拠点としている旧山古志村では、未だ、地震の爪あとが残ってはいるものの、道路をはじめライフラインの全てが復旧し、いたるところで土砂崩れを起こしていた斜面やのり面も工事が完了し、今では新しい里山の風景を取り戻しつつある。そして、帰りたいと願った住民全員が何らかの形で帰村を果たすことができたことは、発生当時の山古志の悲惨な状況を知る者としては、何よりも嬉しい。彼らは、家を再建し、地震で失くした、田畑や養鯉池など暮らしに欠かせないものを少しずつ取り戻している。山古志の暮らしは着実に復興へと向かっているようだ。

「やまこし道楽村」の活動のきっかけは、アメリカでの二度の大地震の体験だった。地震は、その地でしか暮らしてゆけない者たちの生活を容赦なく奪う。私は、ボランティア活動を通して、地震のために、人生を不幸な形に変えられてしまった人たちを多く支援してきた。中越地震で全村避難をする山古志住民の姿を見た時に、山を離れた彼らはどうやって暮らしを再建するのだろうか。また、再び彼らが山に戻った時に、彼らは幸せな元の生活に戻れるのだろうか。と、アメリカでの体験が蘇った。そして、大地震を経験し知っている者が、黙ったままではいけないと、ある種、使命感のような感覚に突き動かされたのだろう。それが、この活動を始めるきっかけとなった。

中越地震の被災地の大部分が中山間地域である。そこに暮らす人たちは、圧倒的に、そこでしか暮らせない、そこに帰りさえすれば暮らせる人たちである。どこも例外なく、高齢化の過疎地域であり、暮らしは、少しの年金と小さな棚田からとれる米と自家製の野菜、そして春や秋には山からの恵みである山菜をとる。つまり、総合力で成り立っているといえよう。高齢者たちは、大病さえしなければ、何とか楽しくやって行けると言う。

これらの地域は、震災がなくても、いずれは確実に、だが、もう少し緩やかに細ってゆくはずであった。それが、いきなり地震という楔が打たれ、一気に前倒しで未来の現実がやってきたのである。その象徴が山古志である。

中越地震からの山古志の復興は、自然災害からと、人為的災害である過疎化、高齢化からの復興と、二つの復興を意味している。この両方が実現しなければ、山古志へのあらゆる支援は無になる。

住民が戻り、平穏な暮らしを取り戻した今は、やっと折り返し点に到達したところだ。しかも、今までは、世間からの注目と支援という追い風が吹いていたが、これからは自らの力で厳しい向かい風の中を進んで行かなければならない。山古志の高齢者は驚くほど壮健だが、これからは、歯の抜けたように減るのは目に見える。現在、積極的に地域を元気にしようと活動している中年層たちも、10年もしないうちに高齢者となる。そして過疎化、高齢化はますます深刻になり、このまま何もしなければ、山古志の存続は難しくなるだろう。

山古志をはじめとする被災地は、『次の』復興に向かわなければならない時期に来ているのではないかと思う。感謝の気持ちを表すイベントを開催するのも、別の被災地へ支援に駆けつけるのも、恩返しのひとつだろう。しかし、これから向かうもう一つの復興が、社会問題となっている中山間地や限界集落の再生と日本の国土保全のあり方を示すモデルとなれば、地震以来、全国から寄せられた支援への大きな恩返しとなるだろう。そして、地震以来議論され続けてきた、僅か1700人足らずの帰村の為に投入された、数百億の公的資金への一番の意味づけになるのではないだろうか。

そして、被災地とかがわってきた私たちも、活動の拠点を旧山古志村の中でも一番小さな集落、小松倉へと移した。わずか12軒の限界集落と化したこの地で、『次の』復興への小さな取り組みを始めたところだ。